

持続性のある実践的多自然川づくりを目指して ～多自然カルテ・多自然チェックリストの策定～

藤井美有¹

¹中部技術事務所 環境共生課（〒461-0047名古屋市中区大幸南1丁目1-15）

中部地方整備局では多自然川づくりポイントブックⅢ、美しい山河を守る災害普及基本方針などをもとに、多自然川づくりに取り組んできたが、多自然川づくりの実施による影響や効果などを把握するまでに至っていない。現場では、調査から施工、維持管理の一連の取り組み過程の中で、目標や考え方等を各段階で適切に継承する仕組みを構築し、活用していくことが重要である。そこで、管内で実施されてきた多自然川づくりを評価・検証し、実践者によるワークショップ形式での意見交換を重ね、一連の取り組み過程を徹底・継承するためのツール「多自然カルテ」と「多自然チェックリスト」を策定した。

キーワード：多自然川づくり、多自然カルテ、多自然チェックリスト

1. はじめに

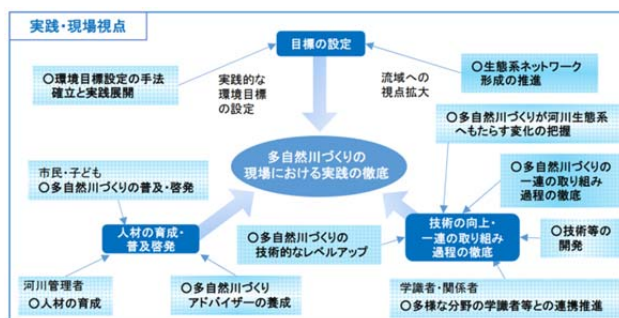


図-1 提言で示された実践・現場視点での対応方針³⁾

国土交通省では平成29年に「河川法改正20年 多自然川づくり推進委員会」によって、再度、多自然川づくりの実施状況の点検・評価が行われ、今後の多自然川づくりの方向性及び具体的な対応方針を、提言「持続性ある実践的多自然川づくりに向けて」¹⁾として公表され、各河川に応じた多自然川づくりの実践が求められているところである。

中部地方整備局においては、平成2年に「『多自然型川づくり』の推進について」²⁾が通達された頃から、各河川で様々な工夫をし、多自然川づくりに取り組んできたが、河川環境のマクロ評価において、多自然川づくりの実施による河川生態系への影響や効果などを把握するまでに至っていない。

また、平成29年度より、提言で示された実践・現場視点での対応方針（図-1）に関し、多方面から取り組んでおり、管内9河川担当事務所を対象とした多自然川づくりの実施状況に関する事例調査（アンケート）において、表-1のように事務所毎に工夫して取り組んでいることがわかったが、全事務所で一貫して取り組まれているものではない。

大きな原因（課題）は二つあり、一つは河川の物理環境の変化や生物応答等に関し科学的、技術的に十分解明されていない事項が多くあることである。もう一つは、実践者の体制等であり、具体的には、計画段階の思想が、設計・施工段階及び維持管理段階に有機的に引き継がれていないことである。通常の河川工事においては、計画から施工まで何年も要することから、段階毎に業務発注される。とりわけ設計・施工段階は、工区毎に細かく分割して発注されるケースが多く、段階によって発注担当課、受注者、対象範囲が変わることが多自然川づくりの徹底や設計思想の継承を難しくしている。それに加え、仕様書等の基準・規定が多自然川づくりに則っていないことも多自然川づくりを難しくしている要因の一つである。

そこで、管内で実施されてきた多自然川づくりを評価・検証し、実践者によるワークショップ形式での意見交換を重ね、計画・設計・施工・維持管理の一連の取り組み過程を徹底・継承するためのツール「多自然カルテ」と「多自然チェックリスト」を策定した。

本報告では、持続性ある実践的多自然川づくりを目指

表-1 多自然川づくりにおける取組み・工夫

内容 \ 段階	計画	設計	施工	維持管理
整備イメージ作成	○	○	○	
環境調査	○			
検討会開催	○			
専門家等ヒアリング	○	○	○	
事務所独自の設計要領		○		
環境配慮事項の記載		○	○	
環境配慮手順書作成			○	
写真撮影				○
河川巡視				○
河川カルテへの記載				○

して、第2章で多自然カルテ及び多自然チェックリストの策定に向けて実施した内容を、第3章で策定した多自然カルテ及び多自然チェックリストの概要を報告する。

2. ワークショップ形式による多自然カルテ・チェックリストの策定

中部地方整備局管内における多自然川づくりの取り組みは、表-1のように各段階単位での取り組みに留まり、計画から維持管理段階の一連の取り組み過程で徹底されているものではない。また、事務所によっては、工夫して取り組んでいるものではなく、多自然川づくりが徹底して取り入れられているものではない。

そこで、現場で使いやすいような多自然川づくりを徹底・継承するためのツールを策定するため、実践者を対象としたワークショップを開催し、ツールを策定した。

参加者の対象は、現場の視点が偏らないよう管内9河川担当事務所に在席する計画段階、設計・施工段階の各段階の実務経験15年前後の実践者とした。グループは、実践者及び技術的助言者の多面的な視点で議論するため、計画段階、設計・施工段階の各段階の実践者で一つのチームを作った。

なお、議論等は、河川の物理環境を大きく改変し、生物環境への影響も大きく、実践的な議論に適していると考えられる「河道掘削」を対象とし、鈴鹿川水系鈴鹿川の過去の事例を基に行った。

まず、事務局が作成した、多自然川づくりを含む設計

思想を確実に継承するために発注者が引継ぎ資料として活用する「多自然カルテ(案)」と、一連の取り組み過程において多自然川づくりを徹底するために発注者が実施する「多自然チェックリスト(案)」を基に、課題等の抽出を行った。その後、課題を受け、多自然カルテ(案)及び多自然チェックリスト(案)の改善案を提示した上で、一連の取り組み過程の実務における使用段階や追加・削除すべき項目・内容、必須事項等について、再度議論した。

3. 多自然カルテ・チェックリストの概要

(1) 多自然カルテ

ワークショップにおいて、多自然カルテ(案) (図-2)を試行し、構成や様式、使いやすさ、継承しやすさ、管理方法の視点から議論し、グループ毎に発表した内容から全体討議を行い、課題等を抽出し反映した。

様式は、設計申し送り事項表、環境配慮表示図(多自然検討・設計・施工段階)、写真台帳の3つで構成した。

設計申し送り事項表は、特記仕様書へ反映しやすいよう文章による記載とした。また、段階が変わっても変更経緯がわかるよう、設計思想を変更する際の変更理由を記載することとした。

環境配慮表示図は、多自然検討段階では、多自然川づくりの経験が浅い実践者でもイメージをつかみやすいよう、環境配慮の対象や必要な環境機能を記載することとした。設計段階では、施工段階において現場で工夫ができるよう、点線や括弧書きとした。

写真台帳は、誰でも容易にモニタリング対象が把握できるものとするため、空中写真や平面図上に、どの場所にどんな種が生息しているか、保全すべき対象がなにかわかるよう記載した。

管理方法については、多自然検討段階は調査課、設計・施工段階は工務課が管理し、施工後は、「写真台帳」を管理課・出張所に引渡し、河川カルテに引継ぐことを想定している。

(2) 多自然チェックリスト

ワークショップにおいて、多自然チェックリスト(案) (図-3)を試行し、実際にチェックを行うことで、実践的な演習を通じて多自然川づくりへの理解を深めるとともに、実践者の視点からチェック項目の妥当性と実用性を議論し、グループ毎に発表した内容から全体討議を行い、課題等を抽出し反映した。

様式は、使用する段階(計画・設計・施工・維持管理)毎のチェックリストを作成し、各段階のチェックリストは、実務で使いやすいよう主に、業務発注・着手時、実施過程・中間報告時、最終報告・検査時の3つに分けた。多自然川づくりを全河川共通のレベルで徹底するため、チェック項目のうち最低限必ず実施すべき「必須項目」

設計申し送り 事項表

環境配慮表示図

多自然検討段階

設計段階

施工段階

写真台帳

写真台帳

を設定した。

維持管理段階では、環境担当課は「河川水辺の国勢調査」等、管理課は「河川巡視」等で多自然川づくりを実

また、ワークショップに参加していない実践者や若手でも使いやすいよう、多自然チェックリストの最初に、

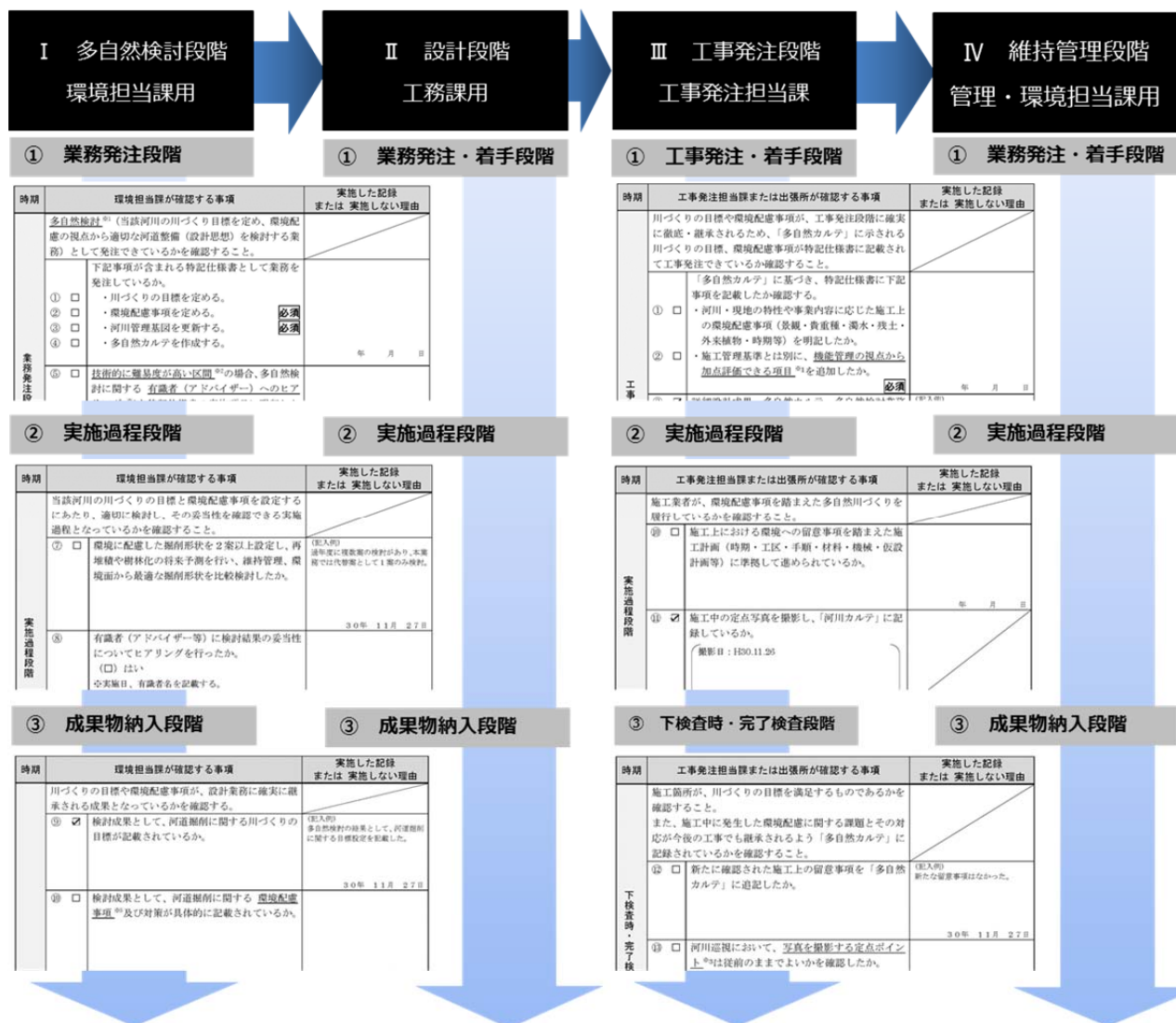


図-3 多自然チェックリスト(案)のフロー

作成する手順や方法をまとめた「チェックリスト作成要領」、チェック状況を管理するための「チェックリスト管理表」を添付した。さらに、各チェックリストには記入例を記入するとともに、用語解説を記載した「補足説明資料」を添付した。

4. おわりに

今後は、多自然カルテ及び多自然チェックリストを実践し、より使いやすいよう見直し・改善しながら、設計思想の継承、多自然川づくりの徹底を行うとともに、実践者自らが多自然川づくりの基本的な考え方を理解し、現場で着実に実践できる実行可能な手引きの作成をして

いきたい。

参考文献

- 1) 河川法改正20年多自然川づくり推進委員会、提言『持続性ある実践的多自然川づくりに向けて』（本文）、p.1, http://www.mlit.go.jp/river/shinngikai_blog/tashizen/pdf/01honbun.pdf, 2017.6
- 2) 国土交通省水管理・国土保全局、第1回「多自然川づくり」レビュー委員会資料、p.4, http://www.mlit.go.jp/river/shinngikai_blog/past_shinngikai/shinngikai/nature-review/1st-shiryoku02.pdf, 2005.9
- 3) 河川法改正20年多自然川づくり推進委員会、提言『持続性ある実践的多自然川づくりに向けて』（概要）、p.1, http://www.mlit.go.jp/river/shinngikai_blog/tashizen/pdf/02teian.pdf, 2017.6